

令和 7 年 3 月 1 日

世田谷区立太子堂中学校
校長 武田 尚之 殿

世田谷区立太子堂中学校
学校関係者評価委員会
委員長 友野 清文

令和 6 年度世田谷区立太子堂中学校・学校関係者評価委員会報告書

はじめに 本報告を読まれる方へ

1. コロナ後の学校と教育について

今年度は、2020 年頭からの新型コロナの影響がほとんど感じられなくなり、従来の学校生活に戻ることができた。もちろん新型コロナが消えたわけではなく、また 2024 年末にはインフルエンザ等の感染症の爆発的拡大も見られたことから、健康・安全に関する日常的な対策は引き続き求められる。

同時に、「コロナ後」を経た学校の姿は、それ以前とは異なるものがある。

一つは、ICT 活用の大幅な進展である。様々な形でタブレットを活用した教育実践が行われている。教師が生徒に向かって一方的に話すのではなく、生徒の活動が中心となる授業が展開されるようになった。

他方で、全国的な傾向として不登校児童生徒の数の増加が続いている。文部科学省の「令和 5 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によれば義務教育段階での不登校児童生徒は約 35 万人であり、前年に比べて約 5 万人増加した。いじめや暴力行為も増えている。

学校教育の意義や役割が根本的に変わっているのではないとしても、子どもにとっての学校や学びのあり方は、「コロナ以前」とは異なるものになっている。これまでの学校教育の蓄積を確認しながら、これからの社会を担う人間の育成のために必要なことを考えていくことが求められているのである。

2. 対話のツールとしての学校評価

さてこれまでも、学校評価の意義について述べてきたが、今年度も改めて指摘しておく。

文部科学省の『学校評価ガイドライン』（平成 28 年改訂版）では学校関係者評価の意義として、「教職員や保護者、地域住民等が学校運営について意見交換し、学校の現状や取組

を知り課題意識を共有することにより、相互理解を深めることが重要であり」、「学校・家庭・地域間のコミュニケーション・ツールとして活用することにより、保護者・地域住民の学校運営への参画を促進し、共通理解に立ち、家庭や地域に支えられる開かれた学校づくりを進めていくことが期待される」と述べられている。また世田谷区も学校評価の目的の一つとして「保護者、地域住民等から理解と参画を得て、学校・家庭・地域の連携協力による学校づくりを進めること」を掲げている。世田谷区立太子堂中学校・学校関係者評価委員会は、これらを踏まえ以下のように報告を行う。報告は学校宛のものであるが、学校の HP に全文が掲載されることから、保護者や地域住民の方にも読んで頂くことを想定している。そのため先ず、報告にあたっての本委員会の基本的立場を述べておきたい。

「誰が子どもを育てるのか」を考えると、社会全体であるという答えがあるとしても、直接的には、教育基本法第 10 条に規定されているように、保護者であると言ってよい。学校教育はある意味で、親の教育の権利と義務の一部を、専門機関としての学校が肩代わりしているのである。そうであれば、保護者（そして地域の人々）も学校教育の当事者である。学校教育は教職員が中心となって行うものであるが、教職員の力だけで行うことができるものではない。

学校関係者評価は、生徒・保護者・地域が学校・教職員を評価し、意見を伝える手段であることは確かであるが、評価には一定の責任が伴うものであって、「学校関係者評価アンケート」は所謂「顧客満足度調査」とは異なるものであるべきであろう。

保護者や地域が、学校教育の「顧客」や「消費者」ではなく、子どもの成長に関わる「当事者」であるとすれば、評価は対話作り・関係作りの第一歩となるものである。文科省が強調するのも「学校評価は対話の手段である」ことである。学校（教職員）・保護者・地域住民・教育行政が各々の立場から関わっていくためのデータの一つが学校評価であって、決して学校を「値踏み」したり「序列化」したりするものではない。

子どもの成長に携わっている人たちが、各々の立場から意見を出し合い、学校をより良いものにしていくことが必要である。選択式のアンケートは、全体のおおよその傾向を把握するための一つの方法に過ぎない。ここから「対話」が始まるのである。

情報発信や情報提供が学校の重要な役割であることは確かである。しかし、それ以前に学校は生徒の教育を行う場である。たとえ「学校からの発信が十分でない」としても、それが「学校の様子を知らない」ことの理由にはならない。

家庭だけで子育てができないのと同様に、学校だけで教育ができるものではない。子ども（生徒）を真ん中にして、各々の関係者が多様に関わっていくことが、これからますます重要になってくるのである。「学校関係者評価」がその一つのツールとして機能すること

を願うものである。

I アンケートの分析報告

本報告書では、令和6年10月～11月に実施された「学校関係者評価アンケート」（生徒・保護者・地域対象）の分析を行う。（項目は「共通評価項目」「学校独自項目」）

回答は、「A とても思う」「B 思う」「C あまり思わない」「D 思わない」「E 分からない」からの選択式であり、本報告書では、A・Bを併せて「肯定的評価」、C・Dを併せて「否定的評価」とする。数値（%）の小数点以下は四捨五入した。

【アンケートの概要】

回収結果は以下の通りであった。

回答率は、

生徒	161名配布	157名回収	回収率	95.5%	（昨年比	+2.8ポイント）
保護者	161名配布	150名回収	回収率	93.1%	（昨年比	+0.4ポイント）
地域	47名配布	28名回収	回収率	59.5%	（昨年比	+2.8ポイント）

回収状況については、生徒・保護者とも非常に高くなっている。一昨年度に回答方式が紙による提出からQRコードからの入力に変更されたことにより回収率が大幅に低下したが、昨年度は学校で様々な工夫を行ったことで、以前の水準まで回復した。今年度もそれが維持されている。地域については、6割の回答率は高い方であって、現在の状況ではやむを得ないであろう。

・生徒アンケート

多くの項目で肯定的評価が80%を上回っており、全体としての評価は高い。特に学習指導に関わる項目で「先生は、課題について、自分で考えたり、友達と考えたりする時間を授業の中で取っている」の肯定的評価が93%（3年生は100%）「先生は、映像やタブレットなどのICTを利用し、分かりやすい授業をしている」の肯定的評価も94%であり、昨年度と同様に非常に高い。他方で「授業では、考えたり話し合ったり、発表し合ったりする機会がある」の肯定的評価は84%（昨年度は81%）で、昨年度より3ポイント上昇しているが、一昨年は93%であった。学年別では、1年生と2年生がいずれも78%、3年生は97%である。これは昨年度と同じ傾向である。また「先生は、提出物やテストなどを分かりやすく評価している」への肯定的評価は72%、否定的評価は21%である。2年生が最も低い、学年による大きな違いはない。この結果から、勉強全体としては生徒が主体的に参加できる授業

が展開されていると言える。評価については、生徒の自己評価も取り入れることを含め、生徒が納得できる評価方法を提示することなどが求められよう。

ところで今年度から「キャリア教育」の項目に、「学ぶことが楽しい」という設問が追加された。これに対する肯定的評価は 68%（1 年生 61%、2 年生と 3 年生はいずれも 70%）、否定的評価は 30%（1 年生 36%、2 年生 27%、3 年生 25%）である。

「学習指導」の項目の設問は主に教師の授業運営についてのものであり、それに対する評価が非常に高いのに対して、三分の一の生徒が学ぶことを「楽しい」とは感じていないのである。ICT 活用や授業の工夫が、必ずしも「学ぶ楽しさ」に結びついていないとすれば、その理由は何か。今後の検討が必要である。

生活指導等に関しては「私は、学校での過ごし方やルールについて考えて行動している」（肯定的評価 86%）が昨年度に引き続き高くなっている。「先生は、学校での過ごし方やルールを生徒に考えさせて指導している」の肯定的評価は 82%（昨年度は 72%）、「私は、先生が指導した学校での過ごし方やルールについて理解できる」は 86%（同 79%）である。また「学校行事は、楽しい」「学校生活は、楽しい」「部活動は、楽しい」も肯定的評価が各々 91%・90%・87%（昨年度は各々 90%・88%・79%）となっており、昨年度に続き、学校生活を「楽しい」と感じている生徒が大多数であると言える。特に部活動への評価が上昇している。「学校行事は達成感がある」「学校生活は達成感がある」「部活動は達成感がある」についても、肯定的評価が各々 89%・81%・80% である。このうち「学校生活は達成感がある」についての肯定的評価は 1 年生 70%、2 年生 77%、3 年生 94% と、学年が上がるにつれて増えている。学校生活の中で様々な場面での「小さな成功体験」の積み重ねが重要であろう。

また学校独自項目である「困ったことがあったら誰かに相談することができる」の肯定的評価は 84%（昨年度は 82%）である。「基本的な生活習慣（服装や言葉遣いや礼儀など）が身に付いていると思う」は 88%（昨年度は 87%）である。

さらに、一昨年度から学校独自項目に加えられた「相手の意見を聴きながら、自分の考えを正確に伝える力が身につけている」については、84% が肯定的評価をしている。1 年生と 2 年生がいずれも 81%、3 年生が 90% である。同じく一昨年度からの新規項目であり、本校の教育目標の一つであるレジリエンスに関わる「様々な活動に主体的に取り組み、困難なこと直面しても自分で考え、また人の助けを借りて乗り越えていく力を身に付けている」についても、83% が肯定的評価（昨年度は 84%）であり、ここでも 3 年生が若干多いが、学年による大きな差はない。

他方で、「私は、家で宿題や e ラーニングなどで学習をしている」の肯定的評価は 62%（昨年度は 71%、一昨年度は 62%）であり、学校独自項目である「宿題や課題などが適切

に出され、家庭学習が充実するように工夫されている」は 80%（昨年度は 69%、一昨年度は 79%）である。いずれも 3 年生が最も高い。また「家庭学習が定着しつつある」の肯定的評価は 64%（昨年度は 65%、一昨年度は 77%）で、1 年生 73%、2 年生 63%、3 年生 68% である。他方で「私は、塾で学習をしている」への肯定的評価は 66%、3 年生は 79% である。家庭での ICT 活用や家庭学習については、家庭環境や生徒の生活スタイルに依る部分が大きい。昨年度も指摘したように、単に宿題を増やすのではなく、家庭での学びの質・内容がどのようなものであるのがよいのかについては、根本的に考える必要があるのではないかと思われる。

キャリア教育については、「自分の進路や将来の仕事について、考える授業がある」「学校は、進路や将来の仕事に関する情報を提供している」への肯定的評価が、各々 68%（昨年度は 61%）と 74%（同 70%）である。いずれも 3 年生の肯定的評価が多い反面、1 年生は 50% 未満である。また「私は、キャリア・パスポートに書いた目標について、考えて行動している」と、学校独自項目の「『キャリア・パスポート』を使用し、普段の学習や生活を、振り返り、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりすることができた」の肯定的評価は、各々 60%（昨年度は 62%）と 69%（同 65%）である。「キャリア・パスポート」については、3 年生の肯定的評価が高いが、学年による大きな差はない。キャリア教育については、各教科・総合的な学習の時間・特別活動の連携を一層図ると同時に、「キャリア・パスポート」が実質的な意味を持つように活用することが必要であろう。

・保護者アンケート

生徒と同様に、全体としては肯定的評価が高くなっている。とりわけ、「学校行事は生徒にとって楽しい」（88% 昨年度は 94%）・「本校の学校生活は、子どもにとって楽しい」（84% 同 88%）・「部活動は、子どもにとって楽しい」（76% 同 79%）など、保護者も生徒が学校生活を楽しんでいると考えている。また「本校は、様々な便りなどで、保護者に情報を提供している」（86% 昨年度は 93%）・「本校はホームページやメールなどで、保護者に情報を提供している」（85% 同 89%）と、学校からの情報提供についても高い評価がされている。他方で「本校は、保護者に指導の重点を伝えている」への肯定的評価は 66%（昨年度は 74%）、「私は、今年度の学校の指導の重点を理解している」は 47%（同 56%）である。この項目の 3 年生の肯定的評価は 67% であるが、1・2 年生は 40% 未満である。昨年度も同様の傾向であり、保護者は、学校からの「情報発信」は十分であると考えてはいるが、「指導の重点」という教育方針を十分に理解しているとは思っていないと言えよう。

学習指導については「本校は、子どもが考える事や、課題を解決することを大切にした授業をしている」（肯定的評価 63%）・「本校は、考えたことを話し合ったり、発表し合った

りする機会がある」(同 77%)では肯定的評価が高いが、「分からない」が各々27%と15%ある。また「本校は、黒板の書き方やプリントなどを工夫している」(肯定的評価47%)、「本校は、映像やタブレットなどのICTを利用し、分かりやすい授業をしている」(同60%)では、肯定的評価が半数程度であるのに対して、「分からない」が各々43%と31%である。これは昨年度も同じ傾向であり、昨年度の報告書では「授業の様子を保護者が知るのは難しいかもしれないが、保護者も学校公開等に積極的に参加したり、家庭で子どもから授業の様子などを聞いたりすることを通じて、学習指導のあり方に関心を持つことを期待したい。」と指摘した。冒頭でも触れたが、授業のあり方はコロナ後に大きく変わってきており、伝統的な一斉教授ではない形が一般的になりつつある。保護者には是非直接そのことを確認して頂きたい。

生活指導については「本校は、学校での過ごし方やルールについて子どもに考えさせる指導をしている」の肯定的評価が62%(昨年度は71%)で、「本校は、教員が指導した学校での過ごし方やルールを子どもが理解している」が71%(昨年度は77%)である。一昨年度はいずれも91%であった。生徒自身が、きまりやルールの意味を考え理解できるようにすることが必要であろう。

キャリア教育・進路指導については、「本校は、子どもの進路や将来のことについて、考える授業がある」「本校は、進路や将来の仕事に関する情報を提供している」への肯定的評価が、各々56%と54%である。また「本校は、キャリア・パスポートに書いた目標について子どもに考えさせる指導をしている」と、学校独自項目の「生徒は、『キャリア・パスポート』を使用し、普段の学習や生活を、振り返り、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりすることができた」についての肯定的評価は、各々54%と49%で、「分からない」が各々30%と31%である。これは昨年度とほぼ同じ数値である。「キャリア・パスポート」の認知度は、次第に高まっているが、さらに保護者に存在と意義を伝えることが求められる。

生徒アンケートで触れた学校独自項目の「生徒は、相手の意見を聴きながら、自分の考えを正確に伝える力が身につけている」と「生徒は、様々な活動に主体的に取り組み、困難なこと直面しても自分で考え、また人の助けを借りて乗り越えていく力を身に付けている」については、肯定的評価が各々65%と66%であり、いずれも3年生で評価が高い。

・地域アンケート

地域については、多くの項目で肯定的評価が80%を超えている。特に、「学校行事の内容は充実している」「学校からのお知らせ(学校だより)などにより、学校の様子が分かる」についての否定的評価はない。その中で、昨年度と同じように「学校協議会や合同学校協議

会が役割を果たしている」「学校運営委員会は活動を周知し、役割を果たしている」は、肯定的評価が60%と63%とやや低く、否定的評価もある、また「家庭学習が定着しつつある」の肯定的評価は54%である（「分からない」が27%）。回答数が28と限られているため、ここから一定の傾向を見ることは難しい、本校は伝統的に地域との結びつきが強い学校である。今後一層「社会に開かれた教育課程」の実現の一環として、地域に開かれた学校になるとともに、地域が学校を支える存在であり続けることを期待したい。

Ⅱ 重点目標について

昨年度末（令和6年3月1日）に、高山知機前校長から出された「令和6年度に向けた改善方策」では、以下の3点の重点目標と、それに関わる「数値による指標」が示されていた。「数値による指標」については「学校関係者評価アンケート、生徒アンケート、各学力調査等を分析し検証を行う」とされているため、本項では、「学校関係者評価アンケート」の結果から判断できる範囲で検討する。なお、これまでに触れた項目もあるが、改めて確認しておく。

重点目標1 一人一人を大切にす教育の推進

◎一人一人を大切にす教育の推進

◎レジリエンスの育成

◎社会を生き抜く力を身に付ける

<数値による指標>

（1）学校生活は楽しい。（生徒：90%以上）

（2）一人一人を大切にす授業や学校行事が行われている。（生徒：80%以上）

（3）困ったことがあったら誰かに相談することができる。（生徒：80%以上）

（4）本校は、生徒一人一人を大切にす教育を行っている。（保護者：80%以上）

（5）「キャリア・パスポート」を使用し、普段の学習や生活を振り返り、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりすることができた。

（生徒：70%以上）

（1）については「学校生活は、楽しい」の肯定的評価が90%であり、目標に達している。学年別では1年生81%、2年生93%、3年生95%である。なお「学校行事は、楽しい」の肯定的評価は91%である。

（2）については、本アンケートの中で対応する設問は、学校独自項目の「一人一人に学力が身につく授業が行われている」である。これに対する肯定的評価は80%（1年生72%・

2年生 76%・3年生 91%) で、全体としては目標に達しているが、1年生・2年生は達していない。

(3)については学校独自項目の「困ったことがあったら誰かに相談することができる」への肯定的評価が84%で、各学年とも80%を上回っている。

(4)については、直接対応する設問はない。なお保護者に対する「生徒一人一人に学力が身につく授業が行われている」への肯定的評価は47%（「分からない」が25%）である。

(5)については、『キャリア・パスポート』を使用し、普段の学習や生活を、振り返り、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりすることができた」の肯定的評価は69%（1年生60%、2年生70%、3年生77%）であり、2年生と3年生で目標に達しているが、全体としては達していない。（1年生が低いのは本アンケートの実施時期も関係しているかもしれない。）

以上のように、今年度の本目標の達成状況は概ね良好であって、昨年度からの改善が見られる。

重点目標2 学力の向上を図る教育の推進

◎「わかる授業」の展開

◎家庭学習への取組（習慣化）

<数値による指標> 学校関係者評価アンケート、生徒アンケート、各学力調査等を分析し検証を行う。

- (1) 先生は自分で考えることや、課題を解決することを大切にした授業をしている。（生徒：85%以上）
- (2) 宿題や課題などが適切に出され、家庭学習が充実するよう工夫されている。（生徒・保護者：80%以上）
- (3) 家庭学習が定着しつつある。（生徒・保護者：80%以上）
- (4) 水曜学習教室や家庭学習、夏休みの学習教室は、生徒の基礎学力の補充・向上に役立っている。（生徒：70%以上）

(1)については、「先生は、課題について、自分で考えたり、友達と考えたりする時間を授業の中で取っている」への肯定的評価が93%で、1年生83%、2年生93%、3年生100%と、全体と1年生以外で85%を上回っている。

(2)については、学校独自項目の生徒の「宿題や課題などが適切に出され、家庭学習が充実するよう工夫されている」の肯定的評価が80%（1年生87%・2年生74%・3年生

81%)で全体として目標に達している。他方、保護者の「学校は、宿題や課題などを適切に設定し、家庭学習が充実するよう工夫している」が48%(1年生52%・2年生25%・3年生65%)で、いずれも目標には達せず、学年毎の差も大きい。

(3)については、学校独自項目の「家庭学習が定着しつつある」についての肯定的評価は、生徒が64%(1年生73%・2年生53%・3年生68%)、保護者が47%(1年生54%・2年生27%・3年生56%)で、いずれも目標には達していない。また学年が上がれば高くなっているとも言えない。先にも述べたように、家庭学習や宿題は、引き続き検討課題であると言える。その際、塾の利用の有無、部活動やスポーツクラブへの参加の有無など、生徒の状況の違いがあることなどを考えれば、可能な限りで個別の働きかけも必要であろう。全ての生徒の基礎学力の定着・向上を図るための取り組みを期待したい。

(4)については、学校独自項目で、生徒の「水曜学習教室(水曜日の放課後に実施。漢検・英検・数検の取得に向けて地域の方に指導していただく。)は生徒の基礎学力の補充・向上に役立っている」への肯定的評価は42%(昨年度は41%)である。(ちなみに保護者に対する同じ設問では41%)。どの学年でも否定的評価より「分からない」の方が多い(30~50%)ことから、より周知を行い、参加を促すことが必要であろう。

以上のように、学校関係者評価アンケートで見える限り、学習についての目標については、4項目中2項目で目標に達しており、昨年度からの改善が見られる。今後とも「学力向上」への取り組みが望まれるが、その際、授業方法や学習時間と同時に「生徒が将来必要とする資質能力とは何か」を考えることが重要であろう。

重点目標3 生徒の主体的な活動の活性化

◎ 生徒が主体として取り組む学校行事の実践

◎ 生徒理解に基づく信頼関係構築の強化

<数値による指標>

(1) 基本的な生活習慣(服装や言葉遣いや礼儀など)が身に付いている。

(生徒・保護者・地域:80%以上)

(2) 部活動は楽しく、達成感がある。(生徒・保護者:85%以上)

(3) 「大志の学び舎」の活動は、小学校との適切な交流がなされている。

(生徒:80%以上)

(4) 相手の意見を聴きながら、自分の考えを伝える力が身に付いている。

(生徒:80%以上)

(5) 様々な活動に主体的に取り組む、困難なことに直面しても自分で考え、また人の助けを借りて乗り越えていく力を身につけている。(生徒:80%以上)

(1)については、学校独自項目で、生徒の「基本的生活習慣（服装や言葉遣いや礼儀など）が身に付いていると思う」は肯定的評価が88%（1年生83%・2年生88%・3年生91%）である。保護者の「生徒は、基本的生活習慣（服装や言葉遣いや礼儀など）が身に付いている」の肯定的評価は75%（1年生65%・2年生77%・3年生88%）であって、生徒・保護者とも目標に達している。なお、地域の「生徒は、基本的生活習慣（服装や言葉遣いや礼儀など）が身に付いている」の肯定的評価も85%である。

(2)については、生徒の「部活動は、楽しい」「部活動は、達成感がある」への肯定的評価は各々87%（1年生81%・2年生92%・3年生86%）と80%（1年生74%・2年生83%・3年生83%）であって、概ね目標を達成している。保護者についての同一の設問では、肯定的評価が各々76%と70%であって、「楽しい」の2年生が80%、3年生が82%だけが目標を達成している。

(3)については、学校独自項目で、生徒の『大志の学び舎』の活動（ふれあい挨拶デー、小学生体験授業・部活動、ふれあい読み聞かせ等）及びボランティア活動（サバイバルキャンプ、ふれあいまつり、マラソン大会等）は、小学校との適切な交流がなされている」へ肯定的評価は67%である（昨年度の『大志の学び舎』の活動は、小学校との適切な交流が行われている」に対しての肯定的評価は54%）。保護者への同様の設問への肯定的評価は75%である。なお共通項目で、生徒の「学び舎の小学校に行ったり、小学生が来たりする機会がある」への肯定的評価は44%である。数値的には目標に及ばないが、今後とも様々な活動が行われることを期待する。

(4)については、学校独自項目の「相手の意見を聴きながら、自分の考えを正確に伝える力が身につけている」の肯定的評価は84%（昨年度は80%）で、いずれの学年も80%を上回っている。

(5)については、学校独自項目の「様々な活動に主体的に取り組み、困難なことに直面しても自分で考え、また人の助けを借りて乗り越えていく力を身に付けている」についての肯定的評価が83%（1年生77%、2年生79%、3年生89%）である。（保護者に対する同じ設問への肯定的評価は66%で、否定的評価と「分からない」がやや多くなっている。）

(4)と(5)は、昨年度は90%の肯定的評価を目標数値としていたが、今年度は80%としたため、目標を達成することになった。

この重点目標でも、概ね達成できている。生徒の主体的活動を進めるために、教科の授業の中で、自ら考えると同時にともに学び合う場面を設けること、特別活動や生徒会の諸活動の中で協働する機会を設けることが重要である。なお部活動については、様々な議論がなされているが、生徒にとっての意義と教職員の負担を考慮に入れながら、教員・生徒・保護者が話し合う中で、改善の取り組みが行われることを期待する。

Ⅲ 総括と次年度への提言

学校関係者評価アンケートの結果は、学習指導・生活指導・進路指導/キャリア教育、をはじめとして、すべての面で概ね良好であると言える。本校の学校教育は、地域に根ざした伝統校として、一人一人を大切に展開されている。今後「コロナ後」の学校の姿が現れることを期待し、以下の提言を行う。

- 1 ICT 活用が進んでいる中で、そのメリットとデメリットを確認し、生徒が楽しみながら、主体的な学習ができるような取り組みを一層進める。その際個々の教員の良さ・自律性を発揮すると同時に、学校全体としての授業研究に取り組んでいく。
- 2 2022年12月に改訂された『生徒指導提要』についての共通理解を持った上で、生徒の自己指導能力を養う取り組みを進める。また教職員と生徒・保護者との信頼関係を一層深め、生徒が学校生活の主人公となれる生活指導を行う。
- 3 生徒の良さと存在を認めることにより、安定した自尊感情や自己肯定感が持てるようにする。
- 4 進路指導と同時に、生徒が自己の将来の生き方・あり方を考えられる機会や情報を提供する。特に、各教科教育の中にキャリア教育の視点を導入する。また不登校について、保護者との連携を強め、生徒にとって最善のあり方を検討していく。
- 5 部活動についてはその意義を踏まえ、必要な見直しを行う。
- 6 地域との連携を一層進めると同時に、学校の教育方針や状況についての理解が深まる情報発信を行う。

以上

世田谷区立太子堂中学校・学校関係者評価委員会

委員長	友野	清文
委員	石川	由喜夫
委員	田子	美由紀
委員	高島	美和子
委員	杉山	美以子

